

令和4年11月19日

北関東フォーラム

於：シムックス

## 中斎塾 北関東フォーラム

### 令和4年度 第10回

#### 小人の過ちや必ず文る

おはようございます。開会挨拶で岡本理事長が「小人の過ちや必ず文る」という章句が大変氣になると挨拶されました。人間は過ちを繰り返す動物だと思っておりますので、今日のテーマの「過ち」は、自分自身に置き換えて考える良い材料であろうと思います。

なぜ「過ち」を選んだかという、論語の中で度々繰り返される言葉で比較的多いものから選んでいこうと考え、今回は「過ち」を選ばせて戴きました。ただ、メンバーの中で強い要望があれば、それは取り入れるように致します。前回のテーマ「女子」については、何年も前から女子について話をして下さいという希望がありましたので、取り上げました。

最初に、先日講演をして戴いた吉永顧問の話の中から、少し申し上げます。

「もう大分時間が経ちましたからお話してもよいでしょう」と前置きから始まりました。吉永さんがニューヨークの総領事館におられて、そろそろ帰国という時、大蔵省から帰国を待つように指示があったそうです。

1993年、北朝鮮が提出した原子力開発に関する情報とIAEAの査察結果に重大な不一致があったということで、アメリカが北朝鮮を懲らしめようと戦争寸前に来ていた。当時、日本の北朝鮮関係のパチンコ屋さんが北朝鮮に送金する業務を、或る銀行が一手に引き受けていた。戦争が始まった場合を想定して、ニューヨークにあるその銀行の口座資金を調べて欲しいということだったそうです。結局、ギリギリの段階で戦争は回避され、吉永さんは帰国したということでした。

ここから見えるのは、世の中で表面に出ている話が全てではないという事です。本当に何かをせねばならないという時、国は国民の目をそらすために色々な事を考えて手を打つわけです。何もないような動きをしてみたり、何かとんでもない話をすることがあります。

今回、台湾有事という話が出たり、最近では日本有事という話もチラチラあります。ロシアと中国と北朝鮮が軍事同盟を結んで何か問題を起こす、という話が大方まことしやかに流れるようになっていきます。そういう話を聞けば聞くほど、思い出すのはキューバ危機です。フルシチョフとケネディ、お互いが核戦争の引き金を引きかねない状況で、本当にギ

リギリ寸前のところでストップがかかったという事例がありました。

最近、それと似たような雲行きになっていると感じます。ポイントは中国だろうと思っています。怖いと思うのは、昔はソ連とアメリカの間にはホットラインが引かれていました。現在、中国の視点で見れば、ホットラインを引いていません。

昨日の新聞に、岸田さんと習近平さんが36分間会談をしたという記事がありました。その中で、偶発的な危機を回避するためには高官同士での対話をしなければならないと意見が一致した。メディアは一致した部分だけを強調して取り上げようとしています。しかしそれは表面的なものだけで、本当のところは一体何なのか……。喧嘩しないようお互いジャブを出し合ったということですが、根っこは喧嘩をして自分が勝とうと思っているわけです。中国は喧嘩をして勝つつもりですし、日本は勝つつもりはない喧嘩に巻き込まれよう、或いは参加しようとしています。

中国は日本ともホットラインは引かないし、アメリカともホットラインを引いていません。ということは、中国は今回のロシアのウクライナ侵攻と同じような轍を踏まないためにどうしたらよいか、必死になって暗中模索しているところだと思います。

今回のウクライナ侵攻については、私はロシアがアメリカにはめられて軍事侵攻をしたと思っています。先月、ある講演会でロシアの駐日大使にお会いしました。話を聞いてみると、やはりはめられたという意識はかなり濃厚に持っていました。日本が昔、真珠湾攻撃をした時は、そうせねばならないような立場に誘導させられた結果、アメリカを攻めざるを得なくなったわけです。ガソリンを全部押さえられてしまって、このままだと日本が立ち行かなくなるという状況に追いやられた結果、日本は手を出さざるを得なくなったという話がずっと続いています。

それを踏まえて考えると、ロシアがクリミア半島を軍事侵攻した時は、電光石火で制圧が出来ました。クリミアの人たちからすると、ある日突然戦車がやってきて、行政機関から通信設備から諸々が一瞬にして制圧されてしまった。目の前に戦車があって身動きの取れない状況が一瞬にして出現したわけです。ロシアは、また同じことが起こると踏んだ。今回の動きは、ウクライナ全土を一瞬にして抑えることが出来ると信じ込まされて動いた。その跡が歴然としていると感じています。

一方、クリミア半島がロシアに併合された後のウクライナ側の動きを見ると、アメリカに行ってIT企業を回り、ロシアはまた我々を責めるだろうからその時には味方をしてくれるように頼んで回った。そして今話題のイーロン・マスクさんが、あなたの国をお助けしましょうとインフラ整備を約束したわけです。

今日の上毛新聞に、森元総理が日本維新の会の鈴木宗男さんのパーティーで、「プーチンの立場に立った報道がない。ロシアの肩を持つわけじゃないけれども、日本の報道は偏っているんじゃないか。メディアは公平平等にやってもらわないといかんな・・・」と発言し、鈴木宗男さんも「プーチン氏にも面子があるから・・・」という発言をしたとありました。

先ほど申しましたロシアの駐日大使は、「日本のメディアは全てウクライナ側の報道で埋まっている。これは公平ではありません」と盛んに言っていました。しかし、今は三戦の時代に入っているわけですから、ごく当たり前ではないかと思っています。

三戦とは、世論戦・心理戦・法律戦の三つです。中国の人民解放軍が2003年に、「これからは三戦を大いに活用する任務が与えられた」と公表しました。つまり、中国の軍隊が武力でもって狙った国を抑えるのは最後の最後、相手の国が戦意喪失状態になっていなければいけない。人民解放軍はそれを考えて、三戦を進めなさい・・・と指示を出した。そして、三戦は着々と進行していますね。

私は10年ぐらい前からフォーラムで、新聞の見方について申し上げています。最初のうちは、「新聞に書いてあることは五分五分だと思って読んで下さい」と言っておりました。途中から、「新聞に書いてあることは信じられない話が多いから、ヒントが載っていると読んで下さい」と申し上げています。

現時点では、ヒントがあるのではなくて、何がフェイクニュースかを見抜く力をつけましょうと申し上げる事にしています。フェイクニュースはある方向へ誘導していくために嘘をつく、それからデマを流す、それを見抜くことが大切です。また、新聞でまともに書いてあると思った記事についても、この話がどこから出たのか、どういうふうにお金が動いたのかを想像しながら読めば良いと思っています。世の中の流れは、誰がどれぐらいのお金を何処へ出したか、それによってどういう報道がされているのかを考えれば推測がつくと思っています。

本日のテーマ「過ち」をフェイクニュースと置き換えて考えた場合、世の中は「過ち」だらけです。尤も「過ち」を失敗と捉えれば、先程の「小人の過ちや必ず文る」の如く、メディアは誤魔化し満載だと思っています。ですから自分の心の中に判断基準を持たないと怖いです。世論を誘導しようという方向に、あっという間に持ってかれてしまいます。今は、津波のようなものが襲ってきていると思っています。我々は、これは本当の津波なのか、それとも偽物なのかを見抜く力を持たないと、とんでもない方向に流されていく。そういう時代だと思っています。

津波という言い方をしましたが、3.11の時に津波で多くの方が亡くなりました。私は、現地へ行ってずっと見て回りました。テレビでは映し出さない惨状が現地にはありました。たし、新聞報道でもそこまでは報道されていない悲惨な有様がありました。阪神淡路大震災の時にも私は現地へ行きましたが、その時は、持って行ったカメラで現地の状況を写真に撮ることが出来ました。ところが3.11の時は、シャッターが押せませんでした。こういう悲惨な有様を写真に撮るんじゃない！と心が止めるのですね。

そういう事を考えると、どういう情報であっても、事実であるかどうかの確認はしなければいけません。現地に行って自分の目で見て、耳で聞いて、体験しない限り自分の判断基準の中に情報として入れることは出来ないと思っています。

「小人の過ちや必ず文る」・・・小人で埋まっている国の過ちは必ず飾る。日本は飾る中身を更に酷い状況で飾っています。ですからニュースを見る時、「過ち」という視点で見る必要があるだろうと思います。「過ち」には失敗、単なるミス「過ち」があります。次に過ちを犯させようとする意図のもとに作られた「過ち」があります。だんだん複雑な見方になってきますけれども、根っこで見れば単純です。失敗は繰り返されています。

### 来年の干支「癸卯」

60年周期で歴史は繰り返すという干支学で申し上げますと、来年の干支は「癸卯」です。「癸」は漢字から見ると、総理大臣を意味します。「卯」は繁茂するという意味です。現代に当てはめて見れば、良い総理大臣であれば来年は繁栄する。岸田さんが年内に退陣しなければ来年退陣と思うので、次に出てくる総理大臣が素晴らしい人物であれば、日本は繁栄する。岸田さん並みであれば、没落に向かって進んでいく。日本の国として大きな分岐点になる年であると考えています。

60年前の「癸卯」は昭和38年でした。ですから昭和38年がどういう時代であったかをご自分で調べて戴き、なるほどなと思うものがあれば、それを一つのヒントにして来年を過ごされると良いでしょう。昭和38年に何があったか、ざっと申し上げます。

1月、手塚治虫の「鉄腕アトム」がフジテレビで放映されました。今、日本の国が誇るアニメ文化なるものが出だしが、昭和38年という一つの区切りだったと思っています。

3月、比較的高齢の方はご存知かと思いますが、吉展ちゃん事件が起きました。

7月、防衛庁が国産の対空ミサイルの実験に成功しました。

9月、草加次郎事件が起きました。吉展ちゃん事件ご存知の方はこの事件も知っておられると存じますが、爆弾事件です。つい最近も爆弾予告がありましたね。ですから繰り返しています。

11月、池田首相が郡山で右翼に襲われました。同じ11月、アメリカではケネディ大統領が暗殺されました。

12月には力道山が暴力団員と喧嘩をして、腹を刺されて6日後に亡くなっています。

こう見ると、悲喜こもごもですね。将来も明るいと思うようなこともあるし、物騒で怖い年だと思うものが混ざり合った年だったと感じます。ただし流行歌を見ると、38年に流行ったのは明るい歌ばかりです。35年に発売された「上を向いて歩こう」は53ヶ国に翻訳されて、「すき焼き」という名前で広がっていきました。それから「こんにちは赤ちゃん」「黒猫のタンゴ」「高校3年生」と、皆なんとなく前向きのいい歌だなと感じます。60年周期で歴史は繰り返します。昭和38年にいったいどういうことが起きたか、今申し上げたことを一つのヒントにして、どうぞご自分でお考えいただきたいと存じます。

岡本理事長が言われた「小人の過ちは必ず文（かざ）る」を国の視点で見ると、みな飾っているのだと思います。言い訳の部類が多い。「文る」とは、言い訳・弁解・誤魔化し・自分の過ちを素直に認めないで責任転嫁するということです。そういう感覚で、国は国レベルで必死になって国民の目を逸らそうとして、余計なことをやり過ぎている。国民も不満を溜めるから、暴発をする。そういう事が顕著に出た年が昭和38年であると思っています。

それから60年経って、来年同じ「癸卯」いう年が巡ってきます。したがって、悲喜こもごもはかなりきついものが出ると思っています。私は毎年、1月1日発行の季刊誌「知足」で干支について書いています。令和3年1月1日発行の「知足」の巻頭言には、こう書いてあります。

#### 辛丑（しんちゅう・かのとうし）

「辛」は、つらい・酷い・苦しい。

「丑」は、始まる・止まらない。

ウイルスとは共存

ニューノーマルの世界

新しい社会の仕組みが始まった

生き延びることに全力投球

そこから新しい世界を開く

更に、干支について書いた文章には、「令和3年は生き延びるために必死にもがく年回り」とあります。

今年、令和4年1月の「知足」には、「もがいても、もがいても、どうにもならない年」という書き方をしています。これは悲喜こもごもを見て、悲しい側の立場に立った時にそ

うという言い方が出来ます。喜ばしい方は、会社を経営している方はこんなに上手くいっていいのだろうかと思うぐらいに利益が出る。とても嬉しい流れになっている方も当然おります。ただ、氣を付けることは、仮想通貨で一氣に凄まじい転落をした事について追及が始まっています。孫さんが凄まじい借金を抱えているという報道もされています。ですから、一見よく見えるものも怖い部分はあるとお考え戴くのが良いと思っています。

では、来年はどうか。もがいている状況の中で、令和5年は更に悪化する一方です。もがいている方については、良い話はそんなに出てきません。ひたすら耐え続けて、今に見ておれ！俺は生き残る！ということを確認に腹の中に置いておかないと、あっという間に流されてしまう、そういう年回りです。ですから、必死になって耐え忍ぶ、生き残る、生き延びる、これを来年はやっていかないと津波が来た時に流されます。津波が来ても、用意をしている方は生き延びることができます。

60年周期で失敗は繰り返す、又は繁栄は繰り返すと申しました。国としての過ち、自治体としての過ち、個人としての過ち・・・これらを失敗と捉えれば、同じ失敗を二度と繰り返さないことが一番肝心です。

では、恒例の質問をさせていただきます。まだひと月ありますが、今年一年を振り返ってみて手を挙げて下さい。

○ 今年一年、良い日が続いたと思う方

有難うございます。くれぐれも申し上げますが客観的に見ないで下さい。主観です。

○ 今年一年、嘘をつくことがなかったし、嘘もつかれなかったなと思う方

○ 今年一年、有難うとよく言うし、よく言われた方

○ 今年一年、身体の手入れをよくやったと思う方

○ 今年一年、自分磨きをよくやったと思う方

自分磨きは、言葉で言うと「事上磨鍊」、日々の生活の中で自分自身を磨き上げてゆくことです。

○ 昨晚寝る時に、明日以降を過去形でイメージして眠った方

来年はいい年だったな・・・と、来年のことを過去形で思って昨晚寝た方はおられますか。出来得る限り未来のことを過去形でみる。そういう癖をつけるとよろしいでしょう。

## 過ち

では、本日のテーマに参ります。レジュメをご覧ください。「過ち」に関して論語を8つ取り上げました。「過ち」について、三つの視点があると私は感じています。

一つは、過ちとは何かを自分自身で定義づける必要がある。単純ミスは過ちというのか。心の底から失敗してしまったなと思うようなものか。自分にとって過ちとは何か。自分を発展向上させるための一つのチャンスであると捉えるか。過ちをどう見るのかが眼目の一つだと思っています。

二つ目の視点は、過ったと思った時には、素直に認めることが必要です。失敗したと思ったら素直に認めればよいのですが、体裁を考えたり見栄を張ったり、後で大変な損害が生ずるから等と考えて素直に認めない、人に責任転嫁をし始める。そうすればするほど泥沼に入ります。

三つ目の視点は、間違いを素直に認めた時には、もう二度と同じ失敗はしないと腹をくくることです。なかなか難しいことですが、これが必要です。

したがって、ちょっとしたミスやちょっとした失敗、世間で言うところの普通の失敗は、本物の「過ち」ではないと考えればよいと存じます。では、三つの観点で「過ち」を見てまいりましょう。

① あやま 過ちて改めざる、あらた 是を過ちと謂う。(衛霊公第十五・29)

失敗して改めようとしな。これを過ちという。世の中に知れ渡っている言葉だと思ひます。

このところまた大臣の辞任ドミノが始まるのかなと思ひて見ておりますが、統一教会絡みの方たちは、記者会見をして色々と言うけれども、全部誤魔化そうという氣持が透けて見える。「小人の過ちは必ず文る」がそのまま出ています。これが日本の国、又は省庁を代表する大臣かと思ひと情けなくなります。間違つたと思ったら改めれば良いのです。ところが改めない。そうすると、いよいよ本物の「過ち」となる。自分で何か失敗したなと思ったら、とにかく素直にごめんなさいと出せば良いものを、大臣や官僚の方達はやらないですね。

② きゆう 丘や幸なり。さいわい 苟も過有れば、いやしく 人必ず之を知ると。(述而第七・30)

孔子は、自分に特別な師匠はいない。万民みな、自分の師匠であるという言い方をしていました。ここでも、私が失敗をしたら必ず教えてくれる人がいる、これはなんと幸せなことだろう・・・と言っています。こういうものの考え方は、大変氣持ちを楽にしてくれ

ます。

ここで思い出すのは渋澤栄一です。渋澤栄一は若い時、高崎城の襲撃と横浜の焼打ちを実行しようとして、寸前で止めた。そのおかげで生き延びたわけです。「毛唐どもを皆殺しにしてくれる」と言っていた男が、その後、毛唐どもの国に行き素晴らしいところを学んで、今度は明治政府に仕えた。その生き方を見て、「あいつは何なのだ！ 恥も外聞もないのか」と悪口を言いふらす郷土の先輩がいたそうです。その先輩に対して栄一は、大分年をとってから、「故郷へ帰るたびに罵詈雑言を言われたけれども、何とか見返してやろうと思って生きてきた。今思うと、そのおかげで自分の気持ちを奮い立たすことが出来たのだから、あの人は恩人だと思うようになった」と述懐しています。

ですから悪口を言ってくれる人というのも悪くはないですね。悪口を聞いた側の心持ちで人は変わるということです。孔子が「自分が失敗したら教えてくれる人間がいる」と言ったのも、諭してくれるのではなく、悪口を言っていたのではないかなと感じるところです。

自分自身に置き換えてみれば、「お前ここ間違ってるぞ」「ここを直した方がいいぞ」と教えてくれる友人、よく言えばアドバイスをきちんとしてくれる人が3人位いたら素晴らしいと思います。明治維新の志士たちは、そういう諫言を言う人が結構いました。終戦直後の経済界も似たような人がかなりいたと思います。

この論語をもう少し拡大解釈します。私は自分で論語を一生懸命学び、それなりに理解できた、自分で納得したなと思う時がありました。そう思った後、もう一度論語を見たら、分からないことだらけなのです。富士山にずっと登って行って頂上に来たと思ったら、今度は富士山が逆さまになって自分の上に広がってしまった感じです。とてもではないですが、世の中知らないことだらけだとつくづく感じました。

その後、私が実行していることですが、自分が分からないことは専門家や詳しいことが分かる友人に聞く習慣を身につけました。そして、そういう人たちと常に連絡がとれるようにしています。例えば、このフォーラムが終わった後、若手の経営者を集めて勉強会があります。今日のテーマは「労働基準法に抵触しないために」ということでしたから、私の理解している事だけではなく、最近の労働基準法に関する問題等があるはずだと思って、専門家に電話をして聞きました。そうしましたら私の知らない視点の話が沢山あったので、なるほどなと思いました。

ちなみに最近の労働基準法関係のトラブルは大体、社員が辞める時に起きているそうです。中小零細規模の会社に多いのは、労働時間がきちんと告知されてないために、辞める時になって残業代等を会社に請求するケースが非常に増えたそうです。そういう時代の流れを教えてくださいました。

何か自分で知りたいと思った時、すぐに教えてくれる専門家と連絡が取りあえると良い。自分に聞いてくる方もいるでしょうが、自分が聞こうとする人も増やしていく。そのようにこの論語を理解しています。

③ 忠信を主とし、己に如かざる者を友とすること母かれ。過ちては則ち改むるに  
はばか 憚ること勿かれ。 (子罕第九・24)

律儀で約束を守る人に親しみ、自分より劣っている人を友達にしてはいけない。失敗した時こそ、面子など捨てて即座に改めるがよい。

これについて大隈重信は、「孔子は罪な事を言う。私の友人は皆、自分よりレベルが低い。この通り実行すると私は友人が一人もいなくなってしまう」と、冗談半分で嘆いたそうです。

その大隈重信に対する西郷隆盛の評価を紹介すると、西郷さんが政府から身を引く時、「大隈さんにはくれぐれも教育なんかやらせちゃいけないよ」と言ったそうです。ですが、大隈重信は大学を作ってしまいました。

逆に大隈重信は西郷さんについて、「素晴らしい人物だったかもしれないが、私の目から見ると偉大なる愚物である」と言い切っています。坂本龍馬は西郷隆盛について、「大きく叩けば大きく響き、小さく叩けば小さく響く」と、器の大きな人物が対すれば西郷さんはとてつもなく大きくなるが、小人物が西郷さんにぶつかった時は、小さい答えしか返ってこないと評価しています。

「己に如かざる者を友とすること母かれ」と言いますが、これはもう少し考えなければいけないだと思います。「己に如かざる者」と思っで見ると、自分の目が曇ってはいないか考える必要がある。一部分は「如かざる者」かもしれないが、他の部分では自分を凌駕する友人ではないのか、という見方が当然必要です。

何か気になる所があったら深く読み込んでみる。色々な目で見ることがあります。 話

が逸れますけれど、コロナの話が出た時、私は「副反応」という言葉が不可解だと気になりました。調べてみたら何のことはない、3種混合ワクチンで重大な副作用が起きて政府が訴えられ、あちらこちらの裁判で政府は負け続けていた。それを受けて、ワクチンを打った時の酷い副作用は「副反応」と呼び始めたと分かりました。ワクチンを打って、裁判で政府が全部負けた。結果として政府は接種を義務から自己判断に変えました。打ちたくない人は打たないで良い、自分の責任で打とうと思う人は打てば良いと法律を変えたわけです。ですから政府がワクチンを推奨すればするほど、政府のやり方は怖いと感じます。ですから私はワクチンは打ちたくはないと考えて接種していませんし、今後も打つつもりはありません。

昨日もワクチン打った直後に亡くなった方のニュースが出ていました。しかし、これもコロナが原因で死んだのか、ワクチンを打った事が原因で死んだのか、因果関係は判然としない。だいいちコロナに感染して死んだという方のカウントにしても、コロナが主たる原因で死んだ人は本当はいないという説を言っている医者グループがあります。ワクチンを打ったことで、持病の基礎疾患が更に進んで亡くなった場合もあるし、コロナにかかり基礎疾患が悪化して死亡した場合もある。したがって死因が何かというのは本当のところは分からないと学者の方々が色々な説を唱えています。

最近ではコロナも下火だという報道をメディアが盛んにしていますが、私は下火だとは思っていません。第8波が来ているという話もあります。私が気にしているのはコロナがきっかけで亡くなった方の数です。初年度は3500人前後でした。2年目の末は15,000人前後だったと記憶しています。今日の新聞では、日本のコロナによる死者数は累計で48,200人でした。(令和5年1月9日現在、累計死者数は60,158人。令和4年の死者数は39,000人前後) 鰻上りで死者数が増え続けています。政府はそういう事実関係は無視して、「コロナは共存できる、経済をもっと発展させるべきだ」と舵を切りました。

ですから、メディアの中身をよく見ていないといけません。本当のところは一体何なのか、疑問を持ったら自分で調べて、納得するまで深く掘り下げる。私が判断をする時には「本質・歴史・大局」の三つの視点で見ると、そう申し上げています。今は、「判断の三原則」が大いに生きる時代に入ったと思っています。

④ がんかい ものあり がく この いか うつ あやまち ふたた **顔回という者有り、学を好み。怒りを遷さず。過を貳びせず。(雍也第六・2)**

顔回は学問が好きで、自分の怒りを表に出すことはしない。いわんや周りの人間に当たり散らすこともなかった。同じ過ちは二度と繰り返さなかった。

顔回は32歳で亡くなりました。孔子から見ると顔回は素晴らしい弟子だったわけです。顔回が亡くなった時、孔子は「あの顔回が死んだのだ。私は天から見放されてしまった。私の後継者が先に死ぬなどということがあるものか…」と大きな声を出して嘆き悲しんだといひます。自分の息子の鯉が亡くなった時、そういう嘆き悲しみ方はしていませんから、よほど顔回に惚れ込んでいたのでしょう。その顔回を孔子が思い出している場面です。

自分の周りを見て、「過ちを貳びせず」という人がいたら、これは大変な人物だと思ひます。人間は過ちだらけだと思ひるので、そうなればいいなと感じます。

や われ いま よ そ あやま み うち みずか せ もの み  
⑤已んぬるかな。吾未だ能く其の過ちを見て、内に自ら訟むる者を見ざるなり。

(公冶長第五・26)

困ったものだ。私は今まで、自分の過ちを自分で見つけ、直さなければいけないと自分を磨く努力している人間を見たことがない。

世も末だよ…という孔子の愚痴ですね。そう言ひますが、次の論語では、自分の過ちを一生懸命見ようと努力している人間のことが書いてあります。ですから⑤と⑥はセットで見ればよろしいでしょう。

きよはくぎよく ひと こうし つか こうし これ ぎ あた と いわ ふうし なに な  
⑥蘧伯玉 人を孔子に使わず。孔子 之に坐を与えて問う。曰く、夫子 何をか為すと。  
こた いわ ふうし そ あやま すくな ほつ いま あた としや い しいわ つか  
対えて曰く、夫子は其の過ちを寡くせんと欲して、未だ能わずと。使者出づ。子曰く、使  
いなるかな。使いなるかなと。(憲問第十四・26)

孔子は50代半ばに、衛の国の大夫であった蘧伯玉の家に世話になっていたことがありま  
す。ですから親しみを感じている人物です。その蘧伯玉が、孔子のもとに使者を出したわ  
けです。

孔子が使者に座を与えて、「蘧伯玉先生は今、どうしておられるか」と聞いた。

使者が答えるには、「先生は自分で失敗をしないように努力をしておられますが、なか  
なか思ひようには出来ないと感じておられるようです」と答えた。

使者が帰った後、孔子が「立派な使者だねえ」と言って褒めた。・・・この師匠にしてこの弟子ありだなと言っています。

私はこのお使い番が西郷隆盛に見えました。島津斉彬は西郷隆盛を見出し、自分の代わりとしてあちらこちらの大名・知人に使者として出しました。その際、「私は家臣の中で宝物を見つけた。私はこの人間を見込んでいるので、是非会って、私と違って色々な事を腹藏なくお話し下さい」という手紙をつけました。その結果、「西郷隆盛という底知れぬ凄い人物がいる。これは島津斉彬公の懐刀、いや懐刀よりすごい人間だ・・・」と話が広がり、西郷隆盛の名前が天下に知れ渡っていきました。島津斉彬という主君にして西郷隆盛という家臣あり、と私は重ねて読みました。

どうぞ論語の文章を深堀りする時は、自分がかつて読んだもの、聞いたもの、見たものの引き出しからこれと思うものを引っ張り出して、もう一度見直しをする。そうやって自分自身の知識を見直したらと良いと存じます。

⑦子貢<sup>しこう</sup>曰く、君子<sup>くんし</sup>の過<sup>あやまち</sup>は、日月<sup>にちげつ</sup>の食<sup>しょく</sup>の如<sup>ごと</sup>し。過<sup>あやま</sup>てば人<sup>ひと</sup>皆<sup>みな</sup>之<sup>これ</sup>を見<sup>み</sup>る。更<sup>あらた</sup>むれば人<sup>ひと</sup>皆<sup>みな</sup>之<sup>これ</sup>を仰<sup>あお</sup>ぐ。(子張第十九・21)

君子（孔子）の過ちは日蝕・月蝕のようなものだ。君子が失敗をすれば、人々は皆それを見ることが出来る。しかも君子は間違いを直ぐに改めるから、なるほどあの人は凄いと人々が仰ぎ見る。

子貢が孔子について説明しています。子貢は口八丁手八丁で頭の切れる人物ですから、実に説明が上手だなと感じます。

論語を読んでいくと、子貢がどうだとか、子路はどうだと色々な名前が出てきます。是非、気になる人物を論語の中から探されると良いし、それを更に深堀りすれば良いと存じます。

⑧人<sup>ひと</sup>の過<sup>あやま</sup>ちや、各<sup>おのおの</sup>其<sup>その</sup>の党<sup>とう</sup>に於<sup>おい</sup>てす。過<sup>あやま</sup>ちを觀<sup>み</sup>て斯<sup>ここ</sup>に仁<sup>じん</sup>を知る。(里仁第四・7)

人が過失を犯す場合は、仲間との関わりの中で犯すものだ。その人の過失を見れば、仁者かどうかが自然とわかる。

お時間が参りました。最後に一言申し上げます。

今年一年は、もがき続けた一年でした。来年はそれが更に悪化します。生き延びるためには面子は関係ない。見得も関係なし。恥も外聞もかなぐり捨てて、必死になって生き延びていただきたい。諦めない限り、生き延びられます。生き延びていることによって、素晴らしい良い時代が巡ってくる。そう信じて来年は耐えて、耐えて、耐え抜いていくべきであると考えています。その鍵は、やはりデジタルにどう向き合うかということになりますね。デジタルへの向き合い方によって、耐え忍び方が変わります。

11月なのでこころ辺で止めておきます。来月の話は更に具体的なもので参りましょう。以上で本日のフォーラムを終了に致します。大変有難うございました。